倭訓栞中編 多之部 十三

和書門
類
三六七二三號
一二三函
三架
六四冊

内閣文庫
和書
類
三六七二三號
六四冊
一二三函
一架

内閣文庫
番號 和36723
冊數 64 (47)
函號 263 7

国立公文書館
National Archives of Japan

倭訓梨中編巻之十三

多の部

洞津　谷川士清纂

たいこ　陳氏楽書ニ大鼓謂之鼓ハ又ハ律書楽図ニ岐伯聞波音摸ハ以テ字書ニ鼓音焚説文ニ長八尺面径四尺ハ又ハ

たいさ　太義ハ出テ薩摩ニたゞがてい常陸ニありかい仙臺ニ出テ孫ハ

たひや　對屋ハ出テ伊勢物語ニ西の對ハ又ハ又ハ殿ニ對スル義カリ対の屋造ハ角木ハ入ル孤戸ハ

たいそ　茶社ニ四季ニ代目爐ハ又ハ田一町ニ四の一代

たいこ　去代代目ハ以テ出テ

大夫ハ五位の通称カリ九て公卿の息ハ童形ヨリ

五位ハ無官大夫ハ〇大輔ハ古へより大夫と同
くるむハ漢音より轉したる和語なり大鑑ハ称宜大夫なり
今諏訪の五官の内の称ハいつ〻ハ須广紀行ハ伊勢の白大夫あり
是祠宜ハ五位と拜する者ハ後世ハ至りてハ大神宮より諸社
の神人自〻甚大夫と称する者ハ僭なるべし昔宿坊といひしハ
今ハ大夫とよべるハ習俗もすたれり〇遊女ハ元和四年三
筋町の遊女の舞とよべり者あり此院ハ後ハ丹波大掾
藤原吉政と云号ハ舞大夫准せられしなり
後ハ家ハ名ハ遊女大夫と呼べり三筋町北里志ハ三曲其
名似たりとて慶長の比室町六條のなるべし寛永中今ハ
朱雀野ハ移されたり一箇の門のみあて先ハ本ハ肥前国嶋
原の城ハ似たるとて俗ハ嶋原と呼べり〇諸職の大夫ハ
張りだいぶと通ずるなり実ハ
たいす　臺子ハ古の奮臺子竹臺子凡紅等なり茶臺の

字北夢瑣言ハ是也今茶臺と称するハ托子なり〇臺子
の式ハ使流球録ハ設古昂於几上煎水將沸用茶末一匙於鍾
以湯沃之以竹刷淪之少頃奉飲と云是也
たいぢ　對治の字梵書ハ多〻ハ〻ハ〻ハ又退治なり
だいず　大咒の音なり物語ハ
だいで　提馬風卒死也調達ハ本ハ准へ〻提婆ハ似たるハ
多〻ハ〻ハ〻ハ
だいだん　臺盤ハ今寺院ハ用る飯臺のなり小臺盤あり
長臺盤ありひ〻ハ〻ハ盤ハ九盆の如きなり〇薩州ハ飯を云
和名抄ハ唐式の大槃式倭注せり〇昏叙指南ハ番直日第
番上下と云へり〇清斉位置ハ予日坐几上置倭臺几方大
者二
たいぢん　嫖客ハ云花柳ハ大盡ハ大神ハ通
せしなり末社大鼓御幣持なるべしいつ

だいぞう　大乗の音なり物語ふるゝ

だいせん　伯耆の大山ハ中国地方一の高山にて式會又郡ふ大神山神社とありて匈形の神社なり續後紀文能實録三代実録よハ大山神とゝゝゝゝ撰集抄よハ大山大智明神とゝゝ味耜高彦根神なり其胸形ハ即母神なり備前ふ赤坂郡にも鴨神社宗形神社並なり鴨ハ高彦根神也神社考ふ大山ハ称徳帝の時社を建とい

たいまい　俗語なり大枚の音なり大枚餅といふ事霊異記ふゝる

たいつ　神宮の文材なりふ太一の事なり式捺事なり伊勢の曲郡ふなぜ村なり神鳳抄ふ土師御薗とゝゝ人ふ土器造り太一とゝゝ土器師の氏れめくす

たいひつ　明の昏ふ代筆の字ゝゝゝ

たいやう　對揚字昏経ふゝゝゝ山槐記ふ城南寺競馬對揚誰人哉とゝゝ○城南寺ハ山城紀伊郡竹田村の安楽寿院也又城南神ハ中嶋村城南神の社く社の東北ふ真幡寸辻あまたは式ふ所謂真幡寸神社二座是ゝ令集解ふ真幡寸神社賀茂別雷神之聚神也とゝゝ

だいぶつ　大佛也北條時房式大佛殿と称ゝ其子朝直大佛式とゝゝ氏とゝゝ

たいもん　大身の音なり大身帯といふも同じく小身ふ歩くふ

たいぞう　俗ふ神ふたいぞう申まゝゝゝ代報の字ゝゝ禮郊特牲ふ祭有祈焉有報焉とゝゝゝ

たいせつ　大切とゝゝゝゝふわしれやんといふ

だいかし　関東の俗語無量の義量座後光式ゝゝゝゝゝゝふ同ゝゝゝゝ○奴樸の半ふ紺のたいかしといふゝ無代の義かゝゝゝゝゝゝゝゝ

たいゝゝ　十二月廿三日式大師講とゝひ赤小豆粥式餉食人

天台大師の忌日ハ廿四日なれとも廿三日満山の講畢りて僧侶も
早朝紅粥を影ゆして喰ふより事起るなりと云
だいきやう　二宮大饗ハ建武年中行事ニ云二宮ハ中宮東宮
也大臣ハ大饗ハ類聚雑要ニ其式委しくえんきやう庇大饗平大
饗と云事ニ云大臣家の母屋の大きやう思の侯ハ日記ニ云
だいどころ　臺盤所の畧也今ハ上下通用の名目なれとも厨
屋なり
たいまつる　土佐日記ニ云奉る也と云ふらと云横音通ス
たいそうい　大鼓の音なり云
たいそけい　大刀契也中右記ニ一物〻〻拠花葉葉ニ二物とす
禁秘御抄ニ大刀節刀と云
たいぎやう　倍ニたいぎやうと云ふ云ふ云ふ　急状請の義ニ過状急
状の例ハ朝野群載ニ云
たいへいらく　大平楽なり二名破陣楽唐明皇所作云

だいぐうん　大元帥ハ云ハ帥字不讀と云ふ続日本紀ニ入唐
僧常暁と云山城国宇治郡法琳寺の地勢大法ハ修すべしとて
大唐より来る大元帥の霊像ハ安置せと云今寺ハ廃して其
像遺ると伊周公其法ハ修して配流ニ逢ハ是ハ栄花物
語ニ云法琳寺ハ小栗栖寺也此法ハ宣のゝ修して臣ハ行ハ
さるの故実也大元帥ハ阿多縛也天竺の神名也釈氏為王公祠之て
怨敵ハ服と云〇台家ハ江州金晴寺ニ大元堂あり
だいふまんぢう　六月の嘉祥ニ大饅頭を下さるハ大夫饅
頭と云ふ云ふ
だいぐんどころへ　臺盤所也女房のちゝひと云ふ清涼
殿ニありて臺盤此所ニある事禁秘抄ニえんきやう禁秘抄
ニ臺盤所二間北間朝餉方敷黄端畳東倚子其南女房簡
入袋と云
たいきやうのま　清涼殿御帳の内法南ニあり大床子の

間とも建暦御記に大床子三脚敷高麗畳とも又かぶ床子
る
たいもつのもの　大食の調のよくも也群書類要に黄鍾ハ
大石調也と石音裳職切食也石食音同
たいせんぶくん　太山府君とも異邦巻山の神にて我
素戔嗚尊に配合せり元八道士の祭る神にて釈氏と又習合
せり古今著聞に康治二年安倍巻親を召て泰山府
君祭をつとめ自南庭に向ハせられひくとゝえ東鑑に院
御瘧修巻山府君翌日平愈とゝえたり
へたくった　田くつるはの欲あり大常會に田欲の式あり史
記に耕田をたくめ
たうろう　東国にて狐を呼常陸にハ白狐と名くこ稲荷
の音なるべし
たくべ　酒たくべなるべとゝえたり人たべといふ給の義く

だくぐ　用器を道具に移ちハ俗語より出たり古道具
を骨董とひふる道具と古董行とゝ〇こまものハ細用
器也〇武家にとゝ道具とゝハ鎗なり道具持と云ハ鎗持の
ごとく
だくき　今物にとゝ呼れハだくれと答人雅を引ざる辞く
だくてき　楽に道調曲あり唐志に高宗自以李氏老子之
後也於是命楽工製道調曲とゝえたり
たくぎん　當人とゝたり當代の人上を申ある辞なり和語
なるべし
だくもや　一條院の比泊瀬詣御嶽精進なる時風なり
物語抄に多くゝ甚後一変して熊野参とて往還絡繹す
此を道者と呼り今蟻の熊野参熊野の道て火を消くなる見
童の話是なり元弘建武の後南山に遷幸ありしより道路通
ー熊野にて伊勢に出来く此を亦道者と呼ふ長寛二

年助教清原頼業勘文ニ伊勢神宮者禁断私幣忌憚佛事熊野者不嫌民庶容受緇素其風乖違其禮懸隔とえ○ちなとく今ハ伊勢を熊野のめく民庶緇徒を系ねとるハ数百年来の風倍ふて大下の行支所也文保二年聽宣ふりゝ参詣太神宮之諸人守式目更不可違犯てけ〳〵ハ憲章ニ循ひ觸穢を謹ゝて系ねせんハ非禮とはあ〳〵しとゝ〳〵り私幣を禁セラレ

〳〵ハ既ふ式ふ云ふ西こハ漢儀より出るあしし

たゝびん　湯瓶の音也とゝ〳〵

たゝせつ　今昔物語ふ刼叙とゝ〳〵り小刀かとの類あるべし

だゝら〳〵　墮落の訛ま〳〵ろくとゝ〳〵り○薩ナふ沒落とゝ〳〵

たゝとく　當惑の音ありとゝ〳〵

たゝげいど　當歳兒也太平記ふ當歳の姫とえゝあり周禮ふ

生歯とあり

たゝゝし　堂童子とゝ〳〵り仁王會ふあり

たゝろ〳〵おん　道陸神とゝ〳〵り道祖神く摂州天王寺の村ニ十一月どろ〳〵ゝ〳〵り祭とゝ〳〵あり道陸神の轉訛ありし

だゝかゝだか　道幸糊とゝ〳〵り系社ニ月ゝ〳〵り道幸ゝ〳〵ゝ

より始むとゝ〳〵ゝ〳〵ゝ傀儡子の賈所の第をもて似せゝ也とゝ〳〵り

たゝおんぐし　唐人反とゝ〳〵ゝ〳〵ゝ事ニて西土の称也ニ月一三折一律

とゝ〳〵是ありゝ三台對類唐人反法國を載ゝり

△たゝさ　田長の義ありゝ神代紀ふゝ〳〵ゝ天邑君ありゝ〳〵詩ふ

田畯ゝ〳〵ゝ

たゝやゝ　文選ふ阿那を訓セゝり又婀娜ふ似ゝ或嬋娟又嫣

婷とゝ〳〵ゝ〳〵ゝ音韻相通セゝり涌氏ニたをゝ〳〵ゝ

同ニ古事記の歌ふほそたおやゝ〳〵ゝ

△たゞ　桶ふあゝ箆をとゝ〳〵京ふかつゝゝけとゝ〳〵ゝ〳〵ゝ箍工

ゝゝゝけとゝ〳〵紀物四ふ京ふ〳〵ゝ江戸ニたゞとゝ〳〵又たゞけ

田舍ふたゝやとゝ和名抄ふ箆を民をたけのゝハとゝあハ其畧ありゝや

輪を入るハ稚也歟圏ともるなり○多賀社ハ近江大上郡也式ニハ
多何神社ともるなり外宮ハ摂社多賀宮式ニハ多賀すなて
よりて高宮ともるなり豊受太神荒魂といふ儀式帳ニハ
飯野高宮ハ式ニハ飯野郡神山神社也ともるなり山上ハまなり
山上ハ佛寺建立の付人々の地ハ移せりこハ神山の麓にて山添村
ハ属ス近江ハも高宮といふ所ありて多賀ハ近し○頼朝の付ハ
多賀重行あり

たゝの　鷹野の義田獵なり山にて山鷹狩といふ雄と主と
ス　ともるなり○高野ハ紀ハ也千載集高野に詣て山路にて守三
法親王

たゝや　ハたゝく世代のかゝるべき道なれや岩ハ苔の衣きハなり
たゝえり　鷹房ハ云禁中にあり西宮記ハ鷹屋在紙屋北と
たゝむ　ハ兼なりたゝハかゝるべきなり

たゝ祢
たゝ祢　万葉集ハ高嶺とよめり○高音れの義なり
和名抄ハ鑽を訓ず又鑿を訓す斬金の義なり
○山姥のたゞ祢といふとのたゝり越州より知る自然の物なり○新撰
字鏡ハ鈐ハたゝよと訓ス字考得ス異記ハ鋺をよめり○
日本紀ハ餡をたゝ祢とよめり本草ハ
をゆひ束める本なり

たゝふ　日本紀ハ仲村をよめり生の義なり
たゝち　新撰字鏡ハ竿をよめり仲竹の義なり
たゝけ　新撰字鏡ハ簟をよめり仲竹の義なり
たゝを　高雄山ハ山形鷹尾ハ似るなるとて呼とハ清澄
峯高雄道揚と元亨釈書ハ見えたるハ清澄の源ハ小野村なり
出中川村を経て高雄愛宕の麓をめぐりて大井河ハ流るる
たゝき　神武紀の歌ハ敵ハ古事記ハ敵ハ敵ハ
たゝきれとて高城の義といふなり今たゝきなるなり○吉

野の高城山ハ親王護良の据ゑ給ふ所也萬葉集ニみやこ北の高城ハ山ゝゝ

東鑑ニ駄餉ゝ去ゝ下学集ニ駄向と云ふ多旅中だゝゝ

中の食ハ云ふ

死する人他界と云ふ和語なり東鑑ニ云ふ云ふ

たゝい

ゝは上下通せり何と云ふ海人藻屑も常の人ニ遊去

他界ゝゝきゝゝ今ハ安ニ移せゝまゝぞ朝通鑑ニハ頼朝以来の武将ハ新例と云ゝ皆殂と云せり長明ハ海道記ニ

はひニ十念相續して他界ニ入ゝ蠅かゝの集る様いつゝ之加ゝゝゝ神代紀ニ

たゝる

垂流ハ云ふ

たゝる

蠅かゝの集る様ハ古事記ニ云ふ人たゝるもいとあり

たゝる

新撰字鏡ニ嘆をよゝり高笑の義ゝ今たゝるゝゝひ

たゝぶち

義経兄頼朝ニ背き奥平泉ニ走り押領使重衡ゝ

拠北上左衛門義行と改む秀衡押領使を譲る高舘殿と号

文治三年秀衡卒四年秀衡子泰衡兄義行ニ背き高

館を改ん云ふ時ニ希有の大風洪水の天変あり大門坊ゝ諫ニ

よて其夜義行出ゝ蝦夷ニ渡る高館ニ残る我死ゝ板目行信

士卒百ゝ人と云ふ守覚法親王左記云爰聊依有所思密招義

経記合戦軍旨彼源廷尉匪直之勇士也張良三略陣平六奇携

其藝得其道者歟

たゝのゝ

鷹の羽乃義箭と云ふ角鷹の羽をつひ一鷹

羽まゝ肅慎の羽ゝも拔せり保安元暦の記ニ左ハ鷲羽右ハ肅慎羽

と云ふ云ふ其尾の羽黒白の文重ゝ列を成て鮮やかニ画

くゝめゝ斜ニ逆上一西ゝ相対ゝゝ成逆文と号ゝ○奥ニハ斑

文の似ゝゝ切り○草ニハ巣ゝ

たゝかこ

鷹架をいふ鷹ハ木と云ふ木ありかゝ成ハ云ふ

いゝり○あゝゝ鷹ニ青鷹ハゝゝ木せゝハゝゝ木成ハゝゝ

たゝぐひ　○　鷹飼ゝ日本紀ニハ鷹甘部とゝゐる所謂鷹師是也
今鷹匠ゝ云ふ西宮記ニ鷹飼王卿大鷹飼者著地摺猟衣綺袴
王帯鷂飼者著青白掾袍綺袴玉帯巻纓皆有下重ゝゝゝゝ
ゝ○太神宮故老口実伝ニ鷹飼事禁之沼取雑魚等同禁之
鵜諸小鳥飼事禁之ゝゝゝゝゝゝ神祇百首ニ
いきめ法宮人ゝかゝゝ五十鈴の原ゝ鷹猟やせん
○神代紀ニ剣柄をたゝぐひゝゝゝたちゝひゝや
たゝかゝ　今の氏姓ニ小鳥遊ゝ出ル兀鷹の義ゝ倍ニ人の多
ゝ集ゝて物ゝひさゝゝ法ゝゝ此義なるゝし○高梨の姓を
平家物語ニ
たゝゝゝ　高座ゝ又高倉の字もゝゝゝ○萬葉集ゝ
高座の御笠ゝはゝけたるハ高御座の蓋とゝゝ○高倉山ハ外文
の御山の古名ゝ
名ゝ代ニ浦ゝをあゝし高ゝゝやふゝふすゝ忍穂井のゝ

たゝまゝ　高眉とゝゝ元服の日本紀眉を剃落ー額ニ高
ゝ墨ゝて眉を作ゝ置ゝゝゝゝ十六七歳の比まて也其後ハ本
眉法元のゝゝたゝゝゝゝ或ハ勅許ゝ此時ニ袖を留ゝ也ゝゝ
たゝまゝ　高圓の宮高圓の尾上乃宮ゝゝゝゝハ天智の皇
子志貴の皇子法住せ法ひゝゝゝゝゝゝ萬葉集を考ゝハ聖
武天皇の離宮ゝゝゝゝ續紀ニ春日の離宮ゝゝゝゝ
大和添上郡ニ高ゝ嶋の高円山とゝゝゝ城上郡ゝ
たゝゝゝ　高濱ハ摂津伊勢伊波ゝゝゝゝゝゝ
たゝ法ゝ　姓氏録ニ高岳首玄播ニ餝ニ郡高岡神社所祭
五座崇道尽敬天皇事代主命應神天皇仲哀天皇猿田彦大神
ゝ伊和大明記録ニ
たゝちゝ　高嵜の城豊後国ニ
たゝぶゝ　九をとゝ高ゝゝゝゝゝゝゝゝ日本紀ニ高

をたびとよめり

たゝぐら　神代紀ニ高鞆をよめり八雲御抄ニハたゝとゝえん
えなり

たゝどの　日本紀ニ楼又観をよめり高殿の義なり臺宇なた
どのやとよめり夫異記ニ楼閣ともゝえなり

たゝやま　中臣秡ニ八えゝえゝう○侍中群要高山御祭なり
於大和国吉野山あるといへり○氏ニ高山とゝハ太平記ニも
たゝゝう　高盛也ひゝゝとりハ平盛なり進物所御厨子所と
もよ江次第ニ御菜とゝも

たゝまた　高松の内裡ハ百練抄ニも高松女御の歌後拾遺
集ニえゝう神ノ社ハ親長日記ニも拾遺抄ニ姉小路北西洞院
東高明親王才跡ゝゝえなり○高松の城ハ備中ニなり又讃岐ニも
たゝむち　鷹鞭山ハ高市郡ニなる今の高取也甚西を壺坂山とも
相撲集ニ

狩人のこゝぬ日あまゝもたゝむち法山のきゝ哀ハのゝゝし邪
たゝゝう　洛陽田楽記ニ高足駄ゝゝう
也今も高足駄ゝゝう
たゝぐき　市恒なり○神代紀ニ雉字を訓するハ高墻の義奪傳
の註ニ雉之牆長三丈高一丈ゝゝなり
たゝゝる　萬葉集ニもたゞぬ云行る反ぬ也ぐゝゝ巻を
ゝなり
たゝはの　高角山萬葉集ニもたゝはの石見美濃郡今たゝはの浦ゝゝ
人穴宮の社あり○高角神社ハ宇陀郡ニも八咫烏神社ゝなり
了武津之身命をあるゝん
たゝつき　江次第ニ高杯萬葉集ニ高坏ゝゝえゝうさゝけ
ふつちたゝつきゝゝもえゝをゝう
たゝゝく　高く花をゝ古事記ニ高往鷹ゝゝえん又たゝゝゝや
ゝやふちゝけゝもはゞゝう

たゝて　高橋ハ神代紀ニ云〇〇氏ふもとの元弘の東軍ニ高橋
宗康云〇古き姓ふ高階氏あり高階師尚ハ業平好て恰子
内親王のゝみやゝ有ゝいとハいとある式この者ハ〇ひとせ〇ふゝて
たゞ〇〇　和名抄ふ相叔をよあり手返の義人式打返云義あり
〇そ漢語抄ふ云拗腕ゝ云
たゞひゑ　新撰字鏡ふ覩低視とよあり耶見也ゝ註せり
たゝゝ〇　神代紀ニ叫林とよあり和名抄ニハ筐を俗ふたゝハ
らゝゝ〇ゝゝゝゝ
たゝむ〇　和名抄ふ筐とよあり竹藁也ゝ注せり〇小野朝
臣篁ハ敏達帝ハ代の末道風の伯父ゝ文徳実録ふ喪父哀毀
過礼ゝも事母至孝ゝも云へ実ふ儒雅の君子也浮屠氏誣る
ふ冥界ふ入ゝ十王式ゝ有ゝ今建仁寺ふ像あり て七月廿
人其事式鮮多ゝて系伝を傳ふ佛ふ溺ゝ事をも云へ也
あふ寃ゝ〇ゝや

たゝすき　延喜式ふ云大嘗會ふくゞてをゝ倍也日
行事ふたゝをりゝゝあゝと同義ゝ
たゝひも　鎧ふいつゝ高紐の義今ゝ相引の緒也ゝ云ふ
古記ふ曽式ぬいで高紐ニ掛ゝ云ゝ有敢也ゝ前ニ其名
所あり又古ゝの鎧ハ多ゝ腹巻の脅割あり左ニ引合せの高紐
脅中ふあり て是ふ付けゝふより去ゝ云ゝ
たゝこゝ　日本紀ニ誣安をよあり光仁紀萬葉ふたハゝ云
〇〇〇〇〇ハの誤也ゝ
たゝゝ〇〇　鷹揚枝ゝ義手ニ束ゝて水式吹けふ用ゝ云ゝ
世諺ふくハ祓ゝたゝゝ〇ゝ是ゝ
たゝゝふ祓　宝貨式秩ゝ云ふ祓式云ゝ式ゝ有ゝ回文ゝ金海兵
制ニも載ゝ式の祓あり式十人共舟ニ釈せり詠歌本紀ニハ長
夜の眠ゝ中ニ十界式流轉ゝ云ゝ除夜ふ枕の下ニ書
吉夢式云ゝハ此夢式云ゝハ此夢ゝ云ゝ居家論

要と夢乗船吉夢船渡主大富貴とゝゝあり

たゝかゝり　鷹のぶちとゝゝ物ハ和名抄鷹犬具ともゝゝゝ

古へ鷹かゝりといひ今わゝゝゝゝ

口餌ひき觜ゝすゝもゝる鷹ありつゝ腰ゝさゝてハ鞭ゝゝゝゝ

たゝゝゝ　和名抄ゝ高尾船ゝゝゝ四方字苑ゝゝ舸ゝ

訓ゝ人ゝ関船也ゝゝ

たゝゝり　高遣戸ゝゝ清涼殿末申の廊下の写ゝあり

ゝゝゝ

たゝのみゝ　「日」吉の社ゝ猛ゝゝゝゝ

たゝゝゝ　鷹司也兵部省ゝ属ゝ○御堂関白道長公乃室

倫子ゝ鷹司殿ゝ称せり

たゝゝゝ　宝寺ハ山城乙訓郡の宝積寺也縁起ゝ宋照をゝ

て中奥ゝゝゝゝ

たゝむゝろ　簟ゝあり仲席の義挑行ゝ編ゝ席ゝゝ俗ゝ

いゝゝむゝろゝ又筍席あり又摜稲簟乃ゝ和名抄ゝゝ簟ハ上声

之重此間名如字ゝゝゝ　俗の古語ゝたゝゝゝゝゝゝ事ゝ警ゝいゝ鷹の啄

たゝのおゝ

落ゝたゝ鳥ゝゝ

たゝまのやま　石見ゝたゝ宮乃山の木ゝ宮ゝゝゝゝ歌ゝ集

ゝハ高角山ゝあり或ゝゝゝゝ事ゝゝゝゝ山ゝゝゝ高宮の山のゝゝゝ

ゝゝ

たゝのゝゝ　鷹の鳥也御湯殿の記ゝ鷹のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ三ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たゞ〳〵ゆび　儀礼の注ニ將指ト云

たゞ〳〵ふたゝ　あゝせてゝる者ハ手ヲ返ス也ト云ヘリ長紙ニ書ヲ

御物すゝ末世ニ云ふひとゝつ奏ハ乃木居ゝやもせん

たゞ〳〵のいけ　釈教の欲ニ蓮ヲ以ハ功徳池ト云ヘリ

とゝ云フ

たゞ〳〵ほとゝ〳〵　世俗ニ宝悉地ト云フあり其如意宝珠ハ楞厳

経ニ如意宝鑰ハ吉祥天の所持槌ハ大黒天の拳印金嚢ハ把る

を南海寄帰傳ニ云ヘリ其剣ありとゝ云ハ又丁子ありとゝ云ハ

異邦黄金の形ありの瓢単ありとゝ云ハ鈔嚢ハ糸形の内ニ方形ニ

〳〵ハ花ヲちぐひとゝ云ハ是銭の形也○かくをみのかくれ笠ハ推根津

彦弟猾の故事神武紀ニ云ヘリ鈔金嚢ハ出槌ハ大巳貴命の故事

如意宝珠ハ神功皇后海中ニ獲たまひ宝鑰ハ天より降て其得

たゞ〳〵のおきれ　万葉集ニ昔有翁号曰竹取ト云たけ

とゝ云る点ヒとり巾取物ハ竹ニ入ル〳〵北溪含華ニ華陽国志ハ

引て一女子ハ辺ニ衣を流ヘリ忽ニ二三節ある竹筒を拾ヘリて

割ハ一小男児の其中ニあるハ竹ハ成ル〳〵ハ四日の説あり〳〵

△だき　酒ハ去ことむニ甘酒ニ成りし時熟湯ハつゝく甚中ニ

入ル至ことのハいつよだきの器ありの

たぎ　添氏ニたぎのぐあり〳〵ハ弾碁也ト云フ後漢書ニ云

四今ハ碁ドきハ遺法ありヘ〳〵ハ弾碁盤ハ碁ヒ云ヘリ

五雑俎ニ弾子之戯ト云ヘリ石弾きあり〳〵

たきぐ　和名抄ニ薪ハあり萬葉集ニ燎木ト云ヘリ海東諸

国記ニ焼木ト云ヘリ欲ニ専ニ云ヘリ

兵制ニ栽ル欲

みちのく紙ハ去の人乃ちく〳〵ハ紙ハおとゝき妻の山ひせ

○薪をこゝとゝあるハ世尊雪山の遊意也薪つきゝ〳〵とあるハ

世尊入滅のとき○薪を抱く火式枚人ハ我国策ホ云ふこと
○源時明ら物ホ東三條ホさつ〳〵ひらるたきぎとい人のことふ
こと云ふなり

たきび　焼火の義燎く○武家に焼火間あり天正本の太平記
に云ふこと　十二間の遠侍ありく〳〵

たきつせ　瀧の瀬あり菱家萬葉に涌瀧式よあり

たきなみ　瀧波ハ伊勢外宮岡本の巽方ホあり荒木田成言

たきどの　瀧の山こ〳〵きく〳〵番の音ホ祢さめさひ〳〵さ岡本の里
滝のおとうホなる殿をとう兼好集ホ大覺寺の

瀧殿云云とう赤染衛門大覺寺の瀧殿をよく
ゆせホさう今たホかる瀧清滝の子くて人さつんるへうりなる
西行集大覺寺の瀧殿の石くも閑院ようつけもて詠をかく成
ぬとゆて云ふまかりてとうる

たきもの　董物の義徳番式又甲煎と同一源氏ホ里方侍

従梅花式三くさと云云とう後小松帝たきものの六種の香ら
梅花花の葉菊花薫葉を四付ら配して侍従里方式附ふ
て去撰式ホ合董物少〳〵云沓冠の分村上帝御製
逢坂とそてハ往来の関とあ手見て問こきかハく
諸安人ホ式こけせうるホ皆こくてあくるま更衣源計子の
其意式ハて薫衣番式敵りしる栄花ホ云云とう又帝と勅
名て源順ホ式して萬葉集を訓解せ〳〵と訓抄云云○
袋くけく紙するのあもせく後まろうして物に入ものの源氏物語
紫式ア日記ホ云云とう たきものの合せのこと又みぎくようけ
むと云ものも梅つくの巻ようんとう○主上御ものハ拝領ありて
もたるぬとのこそ大坂冬陳和議の後神君参内の時禁裡ら
伏見殿御薫物千年菊の方御傳あり
たきかけ　長式楽ようけて餐ホ多ら具く第ホ多炉と入く是
式枕と云

たきぎ〜　焚香七要ふ香燼餘塊〜えんこう
たきまつり　瀧祭宮八五十鈴川の端よあり瀧の天も回
室殿ゟ夫木集ふ
浪〜ゟ花ゟ花ゟ去ゟ乃岩まつ〜たきゟ宮ゟ寄よ
たきろまろ　心のゟゟせきとめかねとゟ萎家萬葉
よ涌豆心〜ゟろ
たきとゟ〜　和名抄よ薫陸をよあり又ふせごゟ
△たくゟ　手操の義ゟり縄をたくゟ〜いゟ拳ゟ意ゟり
海道記よ袖をたくゟ〜すのゟ〜ゟ
たくゟ　倍ふ死理よ奪〜ゟるゟ引たくゟ搔たくゟゟ
といふ源の後頼朝ゟ
御園生のませゟ秋萩七たくゟたくゟるよゟ
たくひ　隠岐玉の海中の神ゟ世神を焼火権現と称ゟ
海部郡嶌前ふゟ〜ゟゟ後鳥羽院播磨の時御製

深ゟ〜ハゟ〜ゟやゟ〜ゟゟ〜ゟ乃畑ゟくゟ
たくむ　巧ゟよゟり手組の義ゟ〜し灵異記よは指攢ゟよ
めり
たくゟ　託磨〜ゟり託磨ゟ原ハ肥後ゟり
たくみ　日本紀よ匠者をよゟめり巧人の意和名抄よ内匠を
ゟちのたくみ木工ゟたくみとよゟり萬葉集よひゟのたくゟ
とゟゟゟゟり
たくゟゟ　貯蓄をよゟり足加つゟ義ゟ〜し童蒙頌韻よ賠
とよゟり蓄たくゟゟ又ゟつゟゟゟゟとよゟり
たいさい　庭訓往来よ不好其他祭と云ゟ禁辞よ忙爵邑余
他祭ゟとゟりて志〜〜ゟひ〜ゟゟ〜ゟちゟひたる意ゟり
たくまし　逞ゟよゟり類優の義ゟ〜し灵異記よ快とゟり
たくなハ　日本紀よ千尋拷縄と云ゟ古事記ふ拷縄之千
尋縄ゟ延為釣海人と云ゟ萬葉集よ拷紲と云長きとゟり

たくひ　萬葉集に栲領巾とゝえたり栲布のひきぬいと
あり細比礼とも出たるハ細布ハ畧して細とのみ書たへとも
くと同しくれハかゝるよめるくとゝ了驚しけるも白き衣
あり

たくまと　顕昭説ふつくとも云ハ和名抄に合了

○たくとのけうりあるとよめるも同ふるへし

たくゝた　痴騃の徒ハ以ゝ俗語ありたくゝだの市に立と
いゝ諺も智慮分別なくて市井に立ハ何ハなさんちまた
比較の意とゝくたくゝとといひ下手ハ畧せしなるへし

たくさね　萬葉集におくゝ紙るちゝの上ハまゝとそ
かゝけたくさねとよめるハ和名抄に出雲嶋根郡に栲嶋又白赤
通女に機織るちきりに云ふハ紙まく時に乃れれる紙ハ捨すし
たくりなくすをとゝて栲嶋に出雲名所記にも
人ちまぬ紙ふるまや栲嶋の海人のとゝ布ハたゝぬ縷ハ

たくさり　馬の牧をいくとゝくり

たくなぐもり　肥後国託磨郡也菊池ちまり義ひしかく

△たけべ　日本紀に健部建部武部をゝえたりたけるべと
とゝけむべゝもゝ

たけど　武田の姓ハ東鑑に武田信光あり甲斐の顕姓あり

○武大和国十市郡仲田神社日本紀に猛田に作ると又舊事
紀に建桁とあり萬葉集に仲田在とゝえたり

たけち　高市ハよあり神代紀及祝詞に古へ大宮所ハ
高市といゝ高ハ褒辞市ハ地とゝゝゝゝ也古事紀雄畧の皇后
の御宮に宮ハ宮のたけちに古陀加流市の地ゝ言移くのゝ
まくる即宮所の事なり泊瀬と城上郡とて高市郡のるふあ
といゝことたくきハ木るくてなるあり

たけゝ　催馬楽に云ふるハ越前也といゝ和名抄に武義の
名に高生をよめり

たけ〻そで　竹束〻ちく鐵炮を防く器く武田家より起るとも
いつり閩ふ竹牌〻〻〻〻〻り〇五代史死節傳ふ周世宗東巨
竹数十萬竿上施版屋号為竹龍載甲士以攻之
たけむま　袋草紙ふ壬生忠見幼童の時内裡より召るゝふ
乘物かゝして乘りかゝき由を中古迄は竹馬ふのりて乘る
〻さよ〻〻作あり〻〻〻〻〻

よさんそうの十訓抄ニ一条院御宇實方中将遅参して挿頭
の不給舞人よかさしてくるべしと仏堂の下ろうして呉竹の枝を
折てさしてゐるる此後試楽のかさしにハ必ず竹枝をかさせり
たけのもとけ　仏の菓子の義吹風ニ菓子ゐるゐるあり
たけのけふり　松の綱木の芽のけふりゐるの類ニて竹を遠くゑん
きにけふりたる如くゐるゐるあり
たけのえやう　竹の花けり始る端山ゐいハ又添草ニ五十ゐいハ名ゐ
多けきそゐ　神代紀ニ武備をよあり
多けたるゐび　長高指の義中指をいう
多けえうたん　うたひ物ニ竹川あり伊勢国多気郡の川あり樵の
歌ある花園ゐいへるを齋宮の遺ニあり其川大神宮式ニ所謂多
気川今云處の稲置川是ゑ飯野郡多氣郡の堺ニて西ゐ稲木川
といへ東ゐ竹川といへり梵網の師ゐ是ゑあり今村の名ニ多
紀葉ニの流ゐ味ハ竹川の渕ゐ味みとりを色かゐゐん

みゐ伝集ニ延喜十七年伊勢宮の御屏風の詞
又頓集ニ
神代よりゐ色をかゐゐぬ仏川のよゐゐるゐかをへゐゐん
此詞續後撰集ニハ仏のよゐゐ君ニかをへゐゐんと改め新
ゐゐれゐ竹ゐとハ齋宮ニかけゐ彼この名所ゐよあゐり
たけのとゐゐび　竹の燈ゐ結燒堂ゐいゐふ
たけあめる加き　源氏ニ四文集ニ石階松柱竹編墻ゐえう
たけの志ゐみち　相撲ニ在りいへり清輔
たけのちやしのゐもすり　竹林ゐそ仏と竹とすり合ゐいゐ
△だこ　唖壷の音あり二階ニ通ゐのゐ人の灰吹の類あり唖壷
番王敦ゐ傳ニえんゐあり
たこち　伊内渋川郡の名竹渕あり今村存ゐたゐちあり
たこめ　新撰字鏡ニ駿ゐ又ゐ竹ゐ巻めゐもよあり

たこなぐ　日本紀に鮹旗とゝゑたり釈に旗の頭鮹の如くい
ふゝり軍旗なるべし
たこむゝ　古事記に四日本紀に九くひゝとあり手脛の義脛
△をいふなり
たごとの注　毎田の月に信濃国更級郡冠嶽の麓に中秋稲
刈水引まかせれて田の面一つに一つ月影のうつるありといふ所
謂十二景の一なり
△だざいふ　大宰府とも筑前国守といふ天平十五年に
置筑紫鎮西府といふ将軍副将軍あり師権師あり大貳小貳官
あり通事を亦あり
△だし　垂汁の義又煮出の義○祭礼の行ひあるいふも正身
に出来の標なるに出をそなふるなり江戸は花だしといふ又一万度大麻
の形に注ぎて万度ともいふ東国よりやたいゝ云是に○北国にて
辰巳の風をとゝいふ

たご　中古田舎の嫁入あるこふ抬くせるかゝ櫃の粗なる
ものの物をいふ草司の音なるべし食物の具に入るゝ器をも称せり江戸にもあるべしといふ○酒壺
に入るゝ器をも称せり江戸にもあるべしといふ
たぢ　東国の俗は牛に田鹿の義なりといふ
たしむ　嗜に注あり新撰字鏡に婇とあり好良なるべし
又者も通用○俗に好物に崇なるゝいふ間情偶奇に平生愛食
之物即可養身とゝゑたり
たしろ　田代は伊豆の地名頼朝の時田代冠者なり
たしろ　日本紀に窮字をよめり畳の義に同紀に之比と
だゝかり　縣神子なるのすゝきの義なるべし
たしく　萬葉集に霰のふる音にいひたれば意に也
たゞく　俗に小児歩に習ひいふ跣字なるべし梵書に
多一跣は跣字去多小児行也とゝゑたり又傍人なるとゝ

云ヒ多聚の義なるべしや

だゝぐ　類聚雜要ニ出金銚子ヲ云ヘリ

たゝらら　延喜式ニ多志良加ヒ口ヒヒヒヒヒヒヒヒ尼瓶ニ似タリ

ヒヒヒヒ水ヲ入る器なり江次第ニ日ヒ紀ニ手白香皇女ヒヒ

ゐせり

だゝづくゑ　又だゝづくゑもゑゑゑゑ禪林小歌ニ置昏棚

机ヒヒヒヒ法然行狀記ニ出文机の形ヒ漳子ヒヒヒヒ方丈記ニ

東の垣ニ窓ヒあけてヒヒニ文机ヒ仏ヒ出せりヒヒヒヒヒヒヒヒ人ヒ世ニ

ヒヒ書院床是ヒヒヒヒ

△たすけのわゝ　和名抄ニ助ヒヒヒヒヒヒヒヒ骨ヒ

△たゞゝゑ　爛ヒヒヒヒヒヒヒヒ徒ニ荒の義なるべし

たゞゝゑ　茅葉集ヒヒヒヒヒヒヒヒ鏡直ヒヒヒヒヒヒヒヒ高ヒ云ヒ

たゝみ　神代紀ニ席ヒヒヒヒヒヒヒヒ体ヒヒヒヒヒヒヒヒ帖

ヒヒヒヒヒヒヒヒ延喜式ニ折ヒヒヒヒヒヒヒヒ又大畳小畳長

畳短畳重畳ヒヒヒヒヒヒヒヒ八重畳ヒヒヒヒヒヒヒヒの山ヒヒヒヒヒヒヒヒ屬ヒヒヒヒヒヒヒヒ古ヒヒヒヒヒヒヒヒ

みヒヒヒヒヒヒヒヒ云薄縁のヒヒヒヒヒヒヒヒ記ニ以菅畳八重皮畳八重絹

畳八重敷波上ヒヒヒヒヒヒヒヒ○縁八帝王紀八繧繝縁也親王大

臣八大紋高麗縁也公卿八小紋高麗縁也四五位雲客八紫縁六

位侍黄縁也ヒヒヒヒヒヒヒヒ海人藻茅ヒヒヒヒヒヒヒヒ○今のたゝみ八中山傳信

録ニ席を以て草ヒヒヒヒヒヒヒヒ包ミ厚ヒヒヒヒヒヒヒヒ一ヒヒヒヒヒヒヒヒ縁ニ青布ヒヒヒヒヒヒヒヒ

ヒヒヒヒヒヒヒヒ西土ヒヒヒヒヒヒヒヒ

東涯も中ニ古者席地而坐後世施床椅而處用磚鋪地ヒヒヒヒヒヒヒヒ

○海東記ニ清見ヒヒヒヒヒヒヒヒ関の逸ヒヒヒヒヒヒヒヒ布たゝみヒヒヒヒヒヒヒヒ

○おほさみヒヒヒヒヒヒヒヒ嶌ヒヒヒヒヒヒヒヒ八紙ヒヒヒヒヒヒヒヒ

めヒヒヒヒヒヒヒヒたゝみヒヒヒヒヒヒヒヒ我ヒヒヒヒヒヒヒヒ

倭人のヒヒヒヒヒヒヒヒ死ヒヒヒヒヒヒヒヒ時の辛ヒヒヒヒヒヒヒヒ

ヒヒヒヒヒヒヒヒ国ヒヒヒヒヒヒヒヒ吾世八家人ヒヒヒヒヒヒヒヒ

○後撰集ニ去年たゝみあくとて行ヒヒヒヒヒヒヒヒ八蓼實

韮の義あるべし今云たでぼのまたづけく三議一統ふたみけ
ゝえくもり下学集ニ蓼水けとも清共納言よたゝみのあるへ
ゝそあやしくれもちり或ハ韮韮や新撰字鏡ニ韮ぶたみく
とよあり

だゞつゐ　小児かゝるむつけてやうすしきるよいつゝだゞきといつゝ
崇るとく意通つゝ无住の雑談集ニ人ふたゞ主かゝるゐとの人ゐゝえ
もり同意かゝるべし○往古の大刀ふだゞ坊と云あり其足跡そ江
州甲賀郡鮎川のもとふ遺まつり○出羽ニて母ぶだゞとの人

たゞま　日本紀ニ手玉と云ハ璝環の義あり

たゞい　俗語あり大体の義あるべし有形之惣称也と也

たゞかゝ　正中の義あり

たゞこと　往事の義物ふたゞるふかゝまちとゝえゝもり

たゞいま　徒然草ニ云ハ遊仙窟ふ向来もとあり

たゞハ　徒然草ニ唯今こと云ハ遊仙窟ふ向来もとあり
日本紀灵異記ふ偉字ぶとあり又脹満大高ぶとゝれたゞ

つゝとよみ萬葉集ニ望月の満ハしゝんとゝえゝつゝみちたゞる
の義ニ新撰字鏡ニ傀をよゝみ又少たけしくもとあり○俗ニ神
のいちをやき火たゞハとゝハ崇ゝ祭義たゞゝハしゝさの謂也と
ゝつ

たゞよふ　日本紀ふ漂又漂蕩ぶとあり径ちふ迷ニの義あり

文選ニ洋くぶもとあり古事記ふたゞよとゝえ○ゝ反ちゝ萬
葉集ニも秋風の吹たゞよハとゝえゝもり

たゞずむ　神代紀ニ彷徨ぶとあり立息の義ちや反た也文選ふ
躊躇もとよみ徒倚或ハ彳亍ぶもとあり○たゞずまひも同しま
ひ反ゝ也浮氏ニ雲のたゞずまひ山れたゞすまひ又年中行事ふ
合ふ公務のたゞずまひともゝえゝもり

たゞまく　反む云んくあんく○唐物たゞまくぶきとハ
たゞ傳ニ有善錦不令人学製焉と云ゝ意ゝ

たゞいと　大太鼓とあり左火焔者挟日輪彫雲竜右火焔者

たゞあり　伊勢物語ふたゞあるやハあるべきとて西默然をたゞ
たゞもかほにもよみ直人式たゞびともあるびともあるゝそ知られし
たゞらめ　和名抄ふ臓式よりふたゞみちふとものを式ちゝ
たゞみめ　著文集ふ盂酌あり今以たゞまあのゝなり
ゆきてうとゝえあり　和布式たゞみゝる者あるゝこと八海蓴なり
たゞきゞ　延喜式ふ叩瓮ゝも叩盆ゝも叩戸ゝもゝえあり古人
擊缶といふ遠意ゝや
たゞりゞゝ　文選ふ楽式よりあり和名抄ふ栃をよりあり楽上謂之
栃と注せり又犂の箭式ヒよりあり新撰字鏡ふ栃をたゞりゝも
ひゞゝりゝもよりあり
たゞうゞみ　帖紙或八畳紙ゝもたゞりたゞむ紙ゝもえ西折形あり類
聚雜要ふ畳紙二帖紅紫入白粉ゝ以今の鼻紙袋ゝいへるものゝ
此遠製ゝくゝり戦人ふ合ゝき殿ふ法ゝゝもみゞゝゝちたゞゝゝ

ゞゝゝもよりあり中山傳信録ふ紙夾烟袋皆自貯胸次以時取用ゝ
ええゝゝり職人ふ合り
たゞみゝ　右まめや城辰ふ法ゝる畳氏ゝ去ゝやゝりし人のゝまゝゝ
也へたゞ編数ゝも主ゝ和むゝ数ゝもはゝゝゝ〇たゞみりめゝもゝ西
駿河坊人のふゝれゝ祇りたゞるゝ村むゝゝゝ礒ゝはゝゝゝ八ゝむ式者
きたゞゝゝゝり
たゞみゝゝ　神社朝廷都鄙遠嶌幽谷ゝいへゝも屋中必用床布
畳板異邦ふ異ゝ
たゞのみか　神代紀ふ諱字式よりあり林ゝの所名ゝ云義ゝゝ
たゞかるひゝ　詩経ゝ匪直也人ゝええゝゝり毛傳ふ直式徒庸
也ゝ注ふたゞかみゝの意也ゝゝゝ
たゞちよゝゝ　日本紀ふ方字式よりあり又阡陌式たゞゝゝのみちよゝ
ちのゝちゝ訓せり和名抄ふゝたゞちゝゝよゝゝゝええゝゝり竪撲の

義あり

たゝすけらは　和名抄ニ彈正臺をよめり

たゞゝ名のゝち　古事記ニ直越道とゝえ萬葉集ニ起草香山ゝ直越の此径ニしてゝよめり今云ゝ峠越ゝ

△たゞび　姓ニ丹比とかゝりとゝハ所枝ゝ出ゝるゝ日本紀ニ見たちた

ゝ萬葉の義あり萬葉又木ニとり○口語ニいハ裳端の義たちかもをしたちゝをもゝぬをとり○爲家集ニ

伊勢嶋やゝゝつの如ーハのたちもとてはゝむまゝ神ゝゝん

こハ三角指代ゝゝふゝゝゝ義ちゝゝはかり代ゝゝゝ古記ニえゝ

ゝゝゝゝ俊忠卿

神風やみつの如ーゝふ云宮てたゝ代ゝ神ニはゝみゝゝゝる

とよめるも同ー

だちん　駄賃の字日本後紀ニえゝり

たちつり　ゝゝ上ゝてゝ何徒然草ニゝゝ地下ゝゝハ出入ゝ云ゝ

たちめゝ　削縫をよめり又つゝゝゝゝや

たちい　紀居代ゝゝ

たちえ　ニ校ゝ梅或ハ黄櫨をよめり氣條代ゝ○冷泉為秀ゝ

とゝゝゝヒいとゝおとひのかゝれやニ校の梅ハちり過ゝゝり

為秀ゝ紀居代ゝ代ゝ代ゝ代ゝ内の當意即妙ゝとゝ

たちゝた　延喜或ハ大狩ニ多人とゝえゝり所司の ニ弦ニ

ゝとり

たちぎゝ　ニ聞の義ゝ馬の具ハゝを古ニ頸總也響鉄の緣をも

てニゝゝゝ人ゝ別ハ制して音金ゝ云物あり或ハ綆をよめり

たちそれ　和名抄ニ馬の股瘴代訓せり无病直ニ腹下腫ニ見せ

とゝよゝゝとり

たちぎみ　道路ニニゝ遥を賣ゝものをゝゝ職人ゝ食ゝゝゝえ

ゝり○涛輕ゝて蜀黍をゝゝぎゝ女ハ代ひの謂せ

たちくび　万葉集に本写之くびはくきれとよめり之くるの俗く
たちため　和名抄に靫はあり下賤人以牛皮補著脛下といへり
　裁食の義なり今金剛と呼の制のめ一
たちさや　新撰字鏡に鞘をよみ又かぐりとよめり又琫もたち
　のかぐりとよめり
たちの紙　大和物語に良少将たちの緒にすべきの紙をとめる
　とゝえたり古草紙見ひらう三代実録に横刀之緒五位已上用
　唐組六位已下並用綺新羅組茅枝遺集物名に小川の橋を
　筑紫よりはるゝくまとくはたともあり太刀の緒草のはしのこと
たちどころ　常に之字をよめり祝詞に之慶とあり日本紀に
　企踵もよめり助語にて之紙速なりと注せり即時の義
たちあがり　源氏にも作之の義く
たちもとり　新撰字鏡に阿紙よみ日本紀に立跳とゝえたり義集集
　よくたちもとりせんとよめり

たちと　古今集よもよめり万葉集に徘徊とゝえ
たちほこる　日本紀に後容紙似せり
たちばき　俗に尤は肩ぬけ中ほど紙のつ我坂に木の大だち
　紙かつきたるせりの例なり
たちのぐ
　山口祭記に八副嫗とあり物忌子良に法きたる者ありといくと
たちおとり　今の母良是なるべし
たちぶくろ　萬葉集に之ちどりとゝえ
たちあつ　和名抄に鮫韜紙よあり
たちまち　和名抄に鈇的紙よあり鈇的音姪電かれハたちま
　ちと轉訛せり
たちふるまひ　長恨歌の舉止をよみたちふるまひともよめり
　起居奉動の意也又之舞振舞といへも体法抄にゝ
たちしのぐ　日本紀に阡紙よあり但之の略也一ハ助倍なり

たちこと　盤桓躇躇徘徊なとの義なりよりて旋ほうの義なり

霊異記に躊躇をたちいさとよめり

たちつまつ〜　彩擇字鏡に踉蹌躊躇峙なとあり

たちなれつき　橘月の義五月なりいつつ

たちやそらく　遊仙窟に遷延万葉集に徘徊をよめり

たちまちれつき　立待月也十七日なる月の山乃上に出るなり立やそ

らひての義なり新古帖に

我ゆゑにたちまちひて待つるをこさそ立待月やそらん

たちぬいぬこころと　仙人の衣なといつつ

△だつ〜　文迁に履万乗其如脱屣に千金萬乗八俗皆貴之

此高絜人視之如草芥脱屣而已言捨也萬葉集にうきぐさ

ぬきつる如くふみぬきてといつつ

たづ〜　田頻の義なり名伊勢物語に田頭ともよりて八千連の

意を兼ねり

たつき　立木也寧敦公の条に木れぐ山のたつ木西行歌に山ざと

のそはのたつ木にみる鳩とよめる是也姓氏録に允恭天皇御宇造

立国境之標とそ

たつぐ　油中抄に田仕る者の妻なは米なくしてせいてせて

夏に成りて田なりくさもなくなりたつぐとなりたつぐ田給の義

たつた　梵書に多駄八小児の行也とも是学行之相とも又たつ

たつ　神代口訣に起源とそ詩経に直猗也といつつ

○立波草あり花をとして名〜白と紫とあり一種大乗蔓の如

きものも名けり

たつふえ　竪笛の義横笛にむかして云なり一節きりに云是成

尺八と云和名抄法隆寺に聖徳太子の尺八と云ものありて長さ一

尺八寸とそ今の世に尺八と称する物八洞簫の故なりとそ律

書楽図に尺八為短笛縦向吹者也とそ又楽書に笛竹

もゝるよゝ吉世拾遺ニ又「休和尚の歌ニ
又八をひゝよゝかゝりゝおゝしゝふいくよゝ老の友ゝゝのうけん
たつごと　和名抄ニ防壁紙よりあり之鷹の義ニ儀式帳ニ蒲
之鷹あり
たづゝひ　日本紀ニ田令紙よりあり物語集ニ伝記ニ使収納ゝゝ
ゝゝ今の氏ニ民使紙よりあり
たつゝや　庭訓往来ニ馳挽達者ゝゝ伝記の道ニ熟ても
以ゝ達人ゝゝ以ゝ今健歩紙のゝ達者ゝ以ゝ如何
たつひた　達者ゝゝ明世説ニ善書者不擇紙筆ゝゝゝ
たつちゝ　塔跋をよあり寮紙ニ
多づゝばゝ　万葉集ニ手束杖の義ニ杖のる ありゝ
多つゝゝら　龍跋ゝ庭訓ニ貫ニ
多ばゝゝみ　手束弓ゝゝ握の歌巻ゝゝ弓ゝゝゝ
多ばゝさゝ　俗ニ物ニたづさゝるゝ云も携ニ同ニ永反ニ

さよひの記ニもゝゝゝ拾遺集ニ
人ゝ八寒世の多紙去けゝゝも君ゝ紙ゝゝたゝ
たはゝさゝ八　弦田川龍田山八歌ニよあり○源重之筑紫ニ行て
ゝゝ浪のたつゝの川紙出ゝゝゝ浪ゝゝゝ八舟路ゝ
顕昭説ニ山崎川紙竜田川ゝゝゝ八希ゝゝゝ又竜田川ゝ
ち巣ゝゝ神ゝの欲古今集ニゝゝゝ又飛鳥川紅葉流
ゝ泛ゝ神ゝ三室山八高市郡也平群郡より逆ニ巽の方ニ二
郡を隔たゝ八彼山の紅葉竜田川ニあゝゝ
たつのゝど　竜門の滝をいゝ素性集ニ西ニ八大和ゝ○西土ニ
て云八鯉の龍ニ化ゝ石あり詩ニ三級浪高奥化龍ゝいゝ
たつゝまひ　日本紀の蛛舞紙よりあり立て居て舞紙ゝゝ東
舞ゝゝゝ
たつゝし　巣集ニゝゝゝ義ゝゝゝ

たつろあき　　續日本紀の宣命ニ拙く多豆何奈伎と云へり源氏ニ霍ニよせてよろ〳〵無便の義と云へり

たつまつり　　今東都公侯の茅宅ニ辰祭とて四月初の辰の日辰切ニ辰の手代人紙にて墨書の屋瘤ニ水紙散さきひきて失火の災あるを厭勝也と云へり治宅編ニ天官暦々日中治水龍数乃自元日之後逢辰為支節と云へり

たつのみやま　　尾張春日井郡吉根村ニあり衣笠内大臣玉津風俤ひたれてやあらん歌の御山は夕立乃とゝ

たつれみやびめ　　龍女紙ニ云へり夫木集ニ

契あまそそられ羽ふきくゝ浪やまも能のゝやひとかはひとの紙

是ハ豊玉姫紙ニ云へり神代紀ニ云へり

たつのやしろ〳〵び　　龍燈紙云五岳真符ニ五嶽各有神夜龍女捧ニ燈供大慰神と云へり是ニ拾芥抄ニ丹後九世戸文珠天龍六齋供燈明と云へり九世戸ハ古へ霊淚と云ひ久志ニ渡るもこれ天

拵立洞ろ磯のあくり是ニ草根集ニ

風吉ありよりたの浦松ふるえ浪ふるく〳〵世ハ能のゝやしろ

安芸国厳嶌駿河国清見寺越中国龍泉寺土佐国幡多郡蹉跎明神周防国野上庄熊野権現相模国鎌倉光明寺の神ハ在〳〵

いつり癸辛雑識ニ云へり水怪と云へり

たでゝ　　鷹ニ云へり蓼文の義責ニ云へり

たてぬき　　経緯紙ニ云へり縦の義ぬきハ貫の義ニ

たてやま　　人紙抔ニて草木紙ニ伐採さるゝ山紙ニ云へり西土ニ封綿上山と云へり是ニ〇越中ニ立山あり同意なるべし神ハ大宝三年ニ出現ニ云へり宮也萬葉集ニハたちやまと云へり

たてゝ　　和社記ニ十三里許山中ニ一里許ニ湖あり

たてゝ　　立涌小立涌あり

たてゝ　　袍の文ニ親王ハ立涌摂関ハ大立涌と云へり又雲曹ニ云へり

たてゝ　　幟紙ニ前立也と云へり口語ニ云へ

たてたるものゝすなわちそれも是なり○日本紀に埴輪の一名をも立
物といへり

たてぬひ　神代紀に作盾者とあり古へは楯ぬひといひて
後世をぬひといふ雲母に楯縫郡あり

たてふだ　源氏桃園紙にはたてふだとも云へり明月記に立文の義を撰集抄にたて
ふだとめの文とも云へたてふんだとも云へり

たてあり　たてあらしとヒヲヒヲやり爝を同し

たてまどみ　竪部の義紫式部日記に云へる横ある紙に
よりて竪に書るを云へり

たでまろや　蓼科山也信濃佐久郡にありて諏方郡小縣郡
に云へる三代実録に信濃国正六位上蓼科山神授従五位下と
云へり今の神祠は小諸牧野侯の所建といへり天に戴き雲を蹈て

崇め給ふ四時峯に雪あり頂に土あり盤石尾に補たるなり
姫子松のなくなりて席と為るに似たり雷ちの床と云所もあり
雷の鳥又雷獣此山に住り其事多く條に詳なり

たてふだまひ　日本紀に楯節舞とあり楯に節とする
る歟とて名くせり吉士舞也といへり

たてゝしき　俗に立てひきと云如くする紙建て意なるへし

△たどころ　朝野群載庭訓往来に田所とあり日本紀に田度又
田地をとあり

たとり　家鳥やしてとも取ぬ鷹に云へり

たとうた　古今集の序に奥の仲也といへり即万葉集の
譬喩歌なり

たどゝし　道に立たどるよりいへり道せり○ろ法に
物語に尚たどゝしおもひたまへまとはせるなり

たとゝあつゝ　日本紀に謚に有り推古紀に稲をたとゝとあるを

ハ拍号の義ニ

たゝ〳〵形容　源氏物語無喻の義ニハ助語ニ用ル

たゞ〳〵ひとへに　今ハたゞ〳〵といふ西行法師ニ小児のたゞ〳〵あゆむ

まろ〳〵ろ

嘗よりしさハかくうちやほ〳〵きてうめやほ〳〵き母や爲〳〵さ

此うたハ貫之ら女の九ツにてよめる也俊頼朝臣母ら氏詠吟ニ載

〳〵ろ〳〵といふ

たゝい　種井と云ふ妻苗代をせんとて田の例ハ井ハ汲ふ

て稲種ハ漬すなりと云ふ今俗ハやはりもつて爲家集ニ

道きハのゆゝしのかこひニまめ〳〵たゝひ侍ハ〳〵やまとうた

たゝぐ〳〵　日本紀ハ雲乃一字を去らよりハ萬葉集ハ棚引雲

〳〵ゝ〳〵古事記ハ天之八重多那雲〳〵

たゝべ　田造ハ神ハ所ハ地名を今もかくよりハ姓氏録ハ田

邉宿禰称神魂命五世孫天日鷲命之後也○伊勢国員辨郡多

奈部神社式〳〵〵国造本紀ハ以天日鷲命爲伊勢国造と云ふ

たゝらし　花鳥ハ和琴ハ八書司の女房あつゞりまゝ夫名ハ

たゝ手馴と云ふ

たゝご〳〵　萬葉集ニ棚橋〳〵〵〵棚のごゝ假ニ打渡ハたる

たゝづゝ　源氏〳〵〵棚厨子ニて二階の類ハ○俗ハ云ふ邪

たゝ〳〵ら　神代紀ニ掌又掌中ハ手裡の義ハ又掌

中ハたゝ〳〵ちともよ

たゝそこ　日本紀和名抄ハ手掌ハ手底の義ニ

たゝず〳〵　日本紀ニ手端遊仙窟ハ手子ハ手の末ハ義也

○足端ハあゝ〳〵とよ

たゝ考　和名抄ハ膜ハ棚肉の義ニハ新撰字鏡ニハ

膜ハよ

たかひち　手肱式よりあり手のひぢく

たかごひ　和名抄延喜式に手巾式よりあり中略てのごひと

〇りゐ拭の義く〇式に湯巾又西ゆたかごひとよりあり〇續後拾遺

集にたかごひれ袖とよめり〇まちすけに汗たかごひ又えくり

繞の画の内に入まり繞臺式にうるみハひるの上に加く三尺ばかりあり

かくあやのトーとり

たかぐとり　棚引曇の義萬葉集によりあり新撰字鏡小疐式

たかくもり　たかくもりとよめり

たかこころ　和名抄に掌式よりあり手心の義く

たかつとの　神代紀に水田種子式にみ又穀式よりあり種つとの

義なり

たかぎりたひ　萬葉集にたかきくひもえにさり空のきりとも

アて曇る式又

たかえくのこつぎ　日本紀に又西手末之調により男女手の先に

てするこぶかり

△たにハ　和名抄に丹波式よりあり谷端の義なるべし四方に山く

重なりて今たんだとゆるハ文字ゆりて西式失つるなるべし

ぬる字ハにとおさつるハ和倍の例なり丹後ハ後世ゆち至り抜にたに

たのうち紙ちりとあり

たにぐハ　溪澗式に谷川の義西土の文にハ川谷とえて皆二

頃に用ゐり谷川式和泉の村名にそたぐハとよめり土佐日記にたな

川とす〇細谷川ハゆまにのぞまもくし備中にハ限らざるべし

たにのく　谷の戸なり谷口に云ふべし

たにはさ　谷狭間の義なるべし

たにゐろ　喜撰式に若詠雲時たにゐろと云とえ西谷蔑の義な

たにぎる　万葉集にハドちに式たにきりとそうしとえ西手掬の義く

たにのこころ　谷の心なり朗詠に群源暮叫谷心寒後撰集に

世中に志ゝまる山に身をかくす谷のそこのいそてをとろん
北山移文に列壑爭議攢峯練詣とゝる意
たゝふとゝろ　新六帖に山ふとゝろとゝゝ
△たゝ祢ぐみ　蠶紙にゝ蠶子にくみたゝる紙あり
たゝ祢ぐゝ　日本紀に多祢嶋武備志に
種子嶋唐書に多尼全浙兵制に種嶋に仮きり今大隅の西に
屬す南嶋志に流球の内とせり○鉄炮の小き式ゝ南蛮の牟羅
叔舎とゝゝの此嶋に始て鉄炮の術伝へたりとゝ世名あり
く○紙炮埃嚢抄に云ふ天文中○鉄炮石とゝ撃こみたる玉の痕あ
る松嶋鎌倉沿海の地に行り新増格古要論に石面鱗々作麓名
日鐔窩赤水根也とゝ見ゝ
△たのこれ　新撰字鏡に莠式しより田の童子の義なるべし
たのむらげ　庇蔭式ゝ古今集に
俗人のゝきて立ゝこのゝとゝはたのむらけあ紀集しきゝ

たのむ乃ゝゝ　伊勢物語に云ふ人ゝ生名本田面鴈とゝり諸
抄も同し云帖に屋のゝゝに入まゝり
たのきれさゐ　田の際の狭井あるべし新六帖に
ゝゝ
雨乃ゝ田ぬきのさゐ井水たまりあるゝまれ世式やおもん
たのゝき式つめ　古今大和ひの云ゝよりあり教長々の説に神今
食新嘗會のゝに庭火の茅式つむ式祝に考てありとゝ
万葉集に
むけきたち春祢事ゝハかくゝゝて梅式折つたのゝき式ゝ
とゝゝゝゝ庭ゝめハゝ之の謬まる事ゝゝゝ
△たゞ祢　東式にあり手はゞぬの義にや○おとひのまゝ日
記にたゞ祢ともおのまゝとかゝるたくひゝまゝゝゝつまるあるべゝ
ゝ
たゞゝ　俗語にたくゝゝの器あるべし海道記に命式たゞ

志とゝえ盛衰記に弓矢たゞしくとゝえ多り口語ふたゞひ至ると
いゝり

たゝ至式　萬葉集に風流士式よりはじまると字義式考ふ
こやび式とよむ〜〜〜もいゝり○たゝれめハ遊女なり出名伊勢
物語に遊嶋式たゝ一波とゝあり肥後ふ在とて後撰集ふ
まめかれとあた名ハ立ぬ名ハまゝ鳥とゝ志ゝ浪とぬれきぬとて
伊勢物語ハ此式とりて名の多とせ〜とゝ

たゞちみ　弓にいゝり古事記手挾天之真鹿兒矢とゝえ萬葉
集にたゞちみてくゝとゝ西新撰樂記に三〜九手挾東鑑に三尺
手挾八的等とゝえ多り後世挾物といゝり矢二手持出て一矢式
矢壂にたゝ〜三矢式ふ小挾〜三度射る式とゝ〜三〜九といゝり
扇皇紙草木の花葉式的とすゝといゝり

たゞちる　瘡瘍の液式ゝり滋汁の義なゝ〜

たゝ〜孫　たゝ〜孫山ハ陸奥平泉のあゝといゝり高館り

横にゝ西土人みちの〜ゝ社と呼り山家集に
きゝとせ安たゝ〜孫山の搖ゝ花よりのゝ多ゝ加ゝ五〜〜〜ハ
手放安く鷹式ハ加ゝ式ゝ初て合式といゝり

たゞちハ　弓葉集にゝ西戲業の義なゝ〜

たゝやゝく　源氏にゝ西日本紀ふ輙式よりゝ毎事即然也と
注せりゝ助語たゝやゝく〜

たゝつけて　髮ふ搖さる跡のつきたゝゝといゝり金葉集ふ
朝霧ハみたゝ多拉にたハつけゝけさハ叩さみとゝ〜ゝて西

たハ去まて　新撰字鏡作劇式よりゝ淫痴の義なゝ〜

たハゝゝかゝ　弓葉集にゝ西田食曷の義ゝや田ふとひとゝ西蔓

弟とゝ西

△だび　茶毗（タビ）とゝりゝ名義集に此曰焚燒とゝ西○在朝の火葬と
道昭より始ゝとゝりゝ先儒多く論せりゝ濟北集ふ火葬爲笠法
殊不知支那吉亦有之列子揚朱篇曰焚之亦可沈之亦可瘞亦可

露亦可多云葬之種火為始也故知火葬不独竺法法也と祇邦
にて火氏汚〻煙氏臭く〻遠く社地浄域に及ぶ氏とて賊盗律
にも残害死屍謂焚焼支解とええ専〻織火氏忌の神ましまれハ
尤忌憚るべきなるべし

たび〻　太平記に太刀だび〻廣小伝りたるとええり乎らの
田舎詞なる〻〻人うだんび〻〻といふ〻演義文に朴刀とええり○
出雲にて雪小だんび〻〻書とい〻昌なり

だびゑ　彩の盈氏に淡繪の音あり新猿楽記に波作繪
とええり萬葉集小旅人氏浪等とあり○下学集小濃繪を
あり海人藻芥小金たゝ氏金濃とあり寸ちすけに玄氏か
きだむもだゝゑともええり著聞集小源氏繪十巻だを
る料紙小出てとええり又織物の二彩氏たひいとい〻
たひまつ　手火松の義十金翼小松明是肥松木節とええ
り燃ハ俗小以手たひまつあり○葬法の炬松ハ神代の遺風

あるべし唐土天竺の葬法にハ○兵家小両だいまつあり風前
燭く筯だひまつあり○蝦夷にていハ獣の通る道に縄氏張く柱を立
弾氏撓毒矢氏まうける氏以て夜の所作也

たびしゐ　新撰字鏡に醢氏ありと又肉びしゐともあり

たびづと　旅裏の義清輔の家に旅づとにとてる加毛いひと
あり

たびのこや　儀式に遥宮とあり人りの人お旅所なり

たびもぐら　旅硯の義名彦集にえ

たびろうす　神代紀小瓢掌氏ありと氏ひろべ夫の意く

△たぶせ　萬葉集小田廬氏ありふせハふせやの義田中の假
庵なり○三代実録小薩摩国多夫施神とええり

たぶるひ　〻〻鷹ふよりあり身ふるひなりといふ

たふく　〻氏ぶ物沼小ちるよのいちかれそたるく〻せ孫ぐ
〻〻あそひかゝ〻〻ええり

たふのや　答の矢なり義東鑑にこれを或ハ當乃矢とも書ハ非なり其射為る矢にて射うへき矢にてあるべし

たふとき　弘法大師のおさなき名にて貴物といへり北史に夫人者天地之貴物とこれを

たうげ　諏方に七不思議あり所謂神渡御作田耳裂鹿社頭雨根入杉塔影蛙狩也其塔の影ハ上宮本地堂の邊穴へ紙にあつれハ塔の形うつる事あり五雜俎に牛首寺窓中見塔影閉門則影從門罅入其影倒見尖反向門塔相去甚遠此理之不可曉者何處無塔何處無窓隙而塔影未必入即入而未必倒也とこれあり

たふーのちき　萬葉集に手節嵜と書り志摩答志郡也

たふまでら　日本紀に狂忘にてあり

△たべ　日本紀に田部とこれを景行天皇の時に定りて田のまにまに上古安閑紀にこれをたかべハ田邊と書り

たへのか　萬葉集に拵穂とも雪穂とも書り白き色のそなとあるこれ也

たべもの　拾遺集にこれを給物の義にて食物にて云も同し

△たまき　俗に云ハ積にまきあり俗に云ハ停とあり又ゆるに同し撰集抄に月ハとれぬる雨そなきれて おもひ人なに兼好法師ありこれ

山風のたまきぬ床も寒きまとろ身にあるこの落むすひつ

たまく　俗に貞實の意にいへり手全の義ありとも書り

たまく　瘡瘡に筆磬とこれを書りとも書り○醤油ハ漢名なり字の如くかるへけとそみそのあ汁にかけそ義なるへしけ人別に製法ありしとより玉みそのけをとけてたまりとよひ一名さしまハ豆油是なるへし

たまき　古事記に手股とこれを書り神代紀に指をたまきたるなる是なり

たまで　玉子とかく卵なり古名ハかひなり出羽の方言ニてつ
とくい○正月川端道喜なる人の献上する糯米ハいり飴ニてとぢ小
判形よりて七ツ三方ニ錫二ツニ白酒ハ入ル是ハ玉子といふと
内て行事ニ云ふ○玉子色ハ象牙色なり
たまで　日本紀ニ玉代とかく古事記仁紀ニ天皇悔恨而悪玉
作人等皆奪其地故諺曰不得地玉作ことゝ云ふなり此より起れ
る地名なるべし○九ッまでの岸ハ住吉ニたり津守國平
君ためぬ玉のしたはしやたゝぬ光ハ未ハ千代もくもしし
此地干珠満珠の出しなどといふ○たまでの水ハ天王寺ニあること
いふり○古事記ニ真たまてゝ手ゝ玉ゝ手ゝ玉ゝ手ゝ玉

喜郡田邊村にあり式にえらめる棚倉孫神社なり○按
たまくら　長歌の末に瓊浦玉浦かといへり神功皇后の鎮懐
石のいでしあるまじバ名くるもやはり五嶋ともあり海東諸国記にも
たまくらに　古事記に重の采女らがもちる玉盞
たはぎぬ　延喜集に珠衣とあるえらめり日本紀に珠襦あり一
説には珠衣はあるべきぬとよめり恠神録に珠袍あり文海披
沙に太始元年頻斯国人来朝以五色玉為衣とへり明律婦女
の服に珍珠縁綴衣履とえらめり
たまひま　適間の義なるべし朝鮮にいふ
たまくし　適字偶字遇字儻字かと沈にあるなまりと云
も図に手間の義あり○會字代にむハ字昏にの義に云
あやまり訓すべしといへりさまたとふかく會なる意なれハ是も通
せり書言故事の注に正其時也とあり屬字を左傳注に
適也とあり

たまのい　享保三年尾州葉栗郡玉井村加茂社に古き井
筒に掘出す天平三年の字あり井筒八九くりてくちびるまで去
めしとえる○按木也板十六枚ありむらし清泉湧出る板物な
うくの橋柱参州八橋の木なりと拾遺抄箱根に湖中より
大杉いでるもあり如是に神代杉といふ信州諏訪村に古代
の温泉のあとより湯艘ほりいだす義濃國安八郡森部村に神
明の社あり昔皇太神数年崇めまいし旧跡といふ岩船を治
橋あんと浮所あり地中に橋柱まだあり大きくて動すべうに
たまくらに　五橋の義玉ハほめたる詞七夕まくらあり
たまのおび　玉帯にいふハ無文巡方有文巡方有文九鞆
光文九鞆の名あり束帯色目に有文に隠文帯ともいへり
○隠文帯和名鈔にもえん唐函簿今に金隠起帯又
瑠璃馬脳犀角白石金青玉かとも用ひ其府其位まちて
差あり○浮氏ハ名たらきに帯とえらめり落花形鴛通

天かゝる名なる物古よりなくもあり
たまくしろ　萬葉集に玉釧くしろ手ともよめり
ともあれくしろ手玉ゆゑ古事記に女鳥王所纏
御手之玉釧といへるは玉釧の誤也といへり
たまぐし　玉柏とも玉ハかむる辞廣く通ハしていふ
なり必す一種に限らゝ（○豕和大嘗會のぶり
その山に出たる玉柏豊のぼりに遊ぶたのしさ
この神酒の柏ぬいへり○菅三品抄に人の命ぬをいふ
ハ絶ゝといふて去るべきなるべしとあり夫木集
ゆゝしけるハたえかハたえて神玉柏さゝやかけてとふもゆ
○萬年草ぬをいふ五雑俎に箱中に隠して年ぬ経て柏き
ぬとゝ云えり玉柏ハ漢名なり○古今集に藻ぬ
ぬ玉柏といひ新勅撰集ぬおもひ入江の玉柏といふて玉石の
類ぬいふこゝて真名伊勢物語にはかゝぬいふ柏石とかたく

石堅石（カたハ）と云ふ○日本紀に堅磐ぬかゝるとゝ云ぬ志ハ
特せゝなり○菅三品抄に石ぬて遠くなる物の臺なるぬ乃
名なりともいへり
たまあへハ　萬葉集に霊合者おめる者ぬとえゝなり心なふ
合ハの義なりといへり
たまよぶひ　禮記に復字をよめり魂ぬ呼返ぬ義招魂と
もゝえゝなり
たまとやぬ　萬葉集ぬ玉生をもむこゝ浦けるハ津の
国武庫の浦なりといへり武庫ハ神功皇后の故事に起りぬ
る名なりとゝ云ゝ玉とやぬとも如意珠を海中にわたまひしに
よりもるなるべし一説に玉のごとめでたやぬ婚とぬけるぬも
いへり
たまのみや　孝謙紀に東院新殿成葺以瑠璃瓦畫以藻繢時
人謂之玉宮とゝえゝなり瑠璃瓦ハ天工開物ぬ

たまくし　喜撰式に若詠夫時たまくしとゝ云
たまのちり　類書纂要に玉塵雪ありとゝ云
たまぢり　魂祭の義奥義抄に歳の終りの荷前祭也と
〇詞花集に
魂まつる年の終りとなりぬれば又やあらんと思へん
兼好云出雲国晦日の所に有きと人のくるをたのまるる事は都にはなき式東の方には松を立て紙をゆひ菓子の供物
長谷のしらとゝ云ゝ多り松草紙をゆひ菓子の供物
しもけめきくなさ人の食物(ヒモノ)まるくまやとあるをうと
云ある説に丑寅の維式鬼門とす十二月八丑正月八寅なを八此
夜追儺して悪鬼式をひ祖先の霊式むかへまつるや時
とゝれ八丑寅八夜半の後なをとし霄より門火式焼く此時招魂
すとゝいつる人ゝ八世倍中元に霊祭式専とゝするなり〇宋
の時十二月十六日以後先式多る俗祭式喚福と云朱子語

類に云ゝ多り
たまてゝこ　玉手箱に浦嶋子ふよりの風土記の今に
くしげともよみ多り是八法苑珠林に龍宮寶篋亦未能算
とゝいつる意なるべし〇錦木の実式も称せり又岩梔子を武
たまかくし　おしてハ梅ゝ式
勝間ともある八己に古事記に云ゝ多り安倍嶋式はけ多る
ゝ合の義相むともはけ蓋とも多ある義なりとゝ
たまくし　珠簾の義なり王勃の詩に出くる字なり異
記に簾字式たゝのすだれとゝ多り〇伊勢物語に
吹風に我身式なさむ玉ぐしの箱ひまもとめて入まとの式
曹子建詩に願為西南風長遊入君懷とゝ云ゝ多り〇糸蘭の
一名に云ゝ
たまはゝ　紀伊海部郡和歌の浦に多り衣通姫式行る

といつり聖武紀ふ春秋二時遣官使祭玉津嶋之神明光
浦之霊とゝえゝり三代実録ゝ玉出嶋神とゝえゝ萬葉集ゝ
玉津嶋ゝゝゝあり續古今集ゝ
いるとかり和歌浦風身よまゝて実初めゝん玉津嶋姫
○五條松原通の新玉津嶋ハ篠俊成々の宅趾也俊成々の時
ゝ祭まつりとゝや俊成々式五條三位と移る
たまでのゝゝ　摂州住吉ゝあり津守国平
君ゝたゝ玉出のゝゝふふふわらぐゝひゝれ未八十代もゝ
神代の千ゝ二種の瓊の玉式ひゝ伝ゝ神功皇后ゝよりし
ゝ泉州堺ゝ如意明神ゝゝゝゝ物語ふ玉出る島
ゝいつゝハ紀ふの玉津島ゝゝゝ○又住吉津守国基の説ゝ南
の社ハ玉津島明神とゝとゝ本朝武林傳ふ篠為憲移住
吉玉津嶋於紀伊国弱浦也ゝゝ安法法師ゝゝ
天降る現人神の相生式おゝくハ久ゝ住吉の松

袖中抄ふ衣通姫ゝゝいつゝゝ
たまゝゝたゝ　萬葉集ゝ剱後玉纏田井ゝゝ朝尾ゝ玉と
纏飾まる意ゝて纏田ゝゝ地名ゝゝひゝ多ゝ纏田ハ馬朱田の
如ゝゝいつゝ日本紀の玉ゝゝゝのあゝゝ堀川百首ゝたまく
梓弓おとゝえゝり
たまゝへのあゝ　玉江の芦ゝて玉江摂州浅水ゝゝ所をハ
ゝ玉枝の義ゝいつゝハいゝわゝ式玉江草ゝゝも見ゝ出
ゝゝゝゝ後拾遺集ゝ
隻切りの玉江の苔式ゝゝゝゝゝゝゝ鳥の之ゝを多紀
たまゝつゝ　萬葉集ゝゝ玉松ゝ枝ゝゝみゝのゝ詠
まゝゝゝゝゝゝゝ

たまのをゝ　玉の緒琴の義なり
たまのあるゝ　魂の在所の義幽冥なり
たまはむ　夫木集
光なやさゝ　如はるゝんとゝろこゝ法玉はむ船なてゝ月かも
合浦なよあるゝや
たまるむすび　玉留魂也十種神宝の死反玉道反玉此ゝあゝ
る又伊弉諾尊の嶋に生たまゝ耶ゝ生大嶋亦名謂大多
麻流別とゝい伊勢度會郡の多麻留も此神なゝ齋ゝるの名
るゝ
たまゝゝさのふハ　玉敷の庭ゝて禁庭をゝるゝ
詠京時玉ゝきゝゝ云ゝゝ○玉のゝてゝも禁裡なゝゝ○
玉の床も同意なり
たまゝきのたち　太神宮式ゝ玉纏横刀あり玉纏の事式ゝは
柄頭の如ゝゝえ寛政官符ゝゝゝ鞘ゝゝえゝあり

たまのおやおき　枡ななゝ玉の緒ゝゝえゝゝゝゝゝ又玉枡と
もゝゝゝゝゝ

迂字はだく〳〵とあり俗にぞみと云て拾遺集に
も舌だみ〳〵こそ物はゝひらゝとゝもゝ
いろ〳〵はうすだみはうすくんともあり金泥銀泥のだみ
とゞびゐの義なるべし彩はよむ彩色の義なり
たみぞ　和名抄に畎はたみあり田中渠也と注せり是なり
たみくさ　民種なりとも民草の義にとりて民法の葉
民の千草なりとある也後十載集に
風とゝゝ民法の葉を年あまと君こそきひく〳〵式の枝まで
たみのと　民戸はいとなり
たみのたくさ　和名抄に民部省式にあり
△だん　物語に多くいひて綾字の音なり和名抄に綾青
而黄也と注せり延喜式の板点にはゝとりとあり紫綾縹
綾蘇芳綾紅花綾支子綾青綾櫨綾薄櫨綾香綾なとゝゝん
なり倍ふだん〳〵筋かゝいとゝ是なりといひて○和名抄に毯毛

席以五色絲為之此間名如字とゝゝん字典に通作綾とゝん
○壇浦は長門也阿弥陀寺に安徳帝の陵あり陵の上に廟あ
りて木像を安置後ろは山岸に壇浦入水の人〳〵の名塔あり
○通倍の軍昔あゝに何段もかりとゝいへ六十間は段とあるべ
たむ〳〵　田村のみやゝ〳〵伊勢物語にいつゝ文徳天皇崩しゝ
まひゝ山城国葛野郡田邑郷真原岳に天安二年葬まり
たんぢ　輟耕録に段子とゝゝんあり衣厨なり
たんぢ　團子とまり西土の称く伊勢におまりとゝひ尾州に
いゝゝゝゝ全術兵制に米圓は訳せり○小麦團子は食物本
草に麪餅餡餡とゝそ
たんき　性急はいに短気なり短慮も同〳〵○病に短気あ
り喘の漸なり

だんる　檀那ハ梵語布施と飜す釈氏要覧に梵語陀那
鉢底唐曰施主陀訛而為檀僧徒より称ずるハ〻〻〻人〻専之人
ハ称ずるハ〻〻又檀越ともいふ舊譯也万葉集に碁擅越と
あるハ碁聖大徳なるべしなるべし多く諱名にや又常人の姓名にや
○伊勢両宮の祠官より檀那と称せ〻ハ既に元弘中にあり
神国決疑編に見えたり

だんぐ　和名鈔に弾弓俗音暖宮と見えたり弾丸も同
今だんごゆみといふを音訛まるなり

たんや　湯婆の唐音なるいふ

だんぎ　源氏さ衣伊勢物語などの代〻のふるき本にまたとれ
だんぎあるべしなほ女房のさぶらひもいとしたんしとある
ひの御の日記にもみえたり

たんべつ　東鑑に段別に兵粮米充てといふなり

たむらひ　日本紀に報字訓とあり手對の義なるべ今ハてむらひ

〻〻〻神武紀のこゝろもよめるといふハおとひてあんなりの義
たんめり　おとひたんめり　ふるといふハおとひてあんなりの義
くてあるなり

たんだい　北條の時中国の探題九州の探題なるべし古へは
以総領使なるべし題ハ署名簠簋内傳に蒙諸星探題も庭訓
往来に設議探題も職原抄に書に己講一日探題も季御讀
経に探題僧綱座ともいへるなり○江次第に敷二色綾毯代帛
抄に毯毛席以五色絲為之〻〻

たんまん　鍛錬の字訓に用ひまた又鍛錬与鍛煉同じとあり

たんおき　西域傳に断食七日即見聖者とあり

だんせん　應仁記に課役の事ハ小たん銭揀別といふなり

豆尾張中嶋郡妙興寺の斯藏の證文に納外宮假殿遷宮要
脚尾張国段銭之事〻〻津國平野の古き田文にも花六子
段銭といふ事見えたり公田肆十町分所納とあり頼朝の時

段別といふとあれて段別の銭とるや

たんいん　源氏ものがたり探韻也韻字は探り拓く詩作る法云

たんけい　大奴紙ものがたり短檠とも高檠とむかしいふ韓退之短檠歌ものがたり長檠もつかへり

だんぢり　檀帳とも河州響田八幡四月八日祭初とすくい

つり或車楽の字はものがたり東國にて屋臺と云土佐の花臺と

海江戸の花ごとといふ祭礼のいつり○一説の宇佐美宇津宮遊

船は餺飥臺屋大隅を討し時十一艘同音に臺屋うつたえ

さいかくとやしらよりの称くるいつり

たむけぐさ　手向種ものがたり萬葉集に手酬草とあり何の

ことと神の手向にすることよて万葉集に濱松ものがたえの手向草とも

手向草ぬさとつかふ孟子にもよあり又榊は手向草とよあり

事藏王集にものがたえ

たむけぐさ　手向水の義七月十五日の水也と藏王集にものがたえ

ものがたり○死者に手向ものがたる事八日本紀のものがたえ儒典梵書

にもものがたる

たむのみ狐　多武峯也元亨釈書に僧定慧卒其徒属上阿

威山取遺体改葬此建祠廟於墓上と是鎌足公也○貞観

五年に贈太政太臣多武峯墓といふ八峯巓にあり是淡海公也

○多武峯の神像破裂古へより七度廟前の古松破裂し脂

流き膚ひしく時年臈の僧神前に閉ぢ御帳に隔て撫奉る

に像裂て臭気あり朝清めして勅使に請といふ

たむきまろ　諏訪の明神に法ふくく鷹の名を定家々

いふしてのくあまたふくく鷹法をむき丸と八名つけ初へ

手向丸の義ものがたし

△だめ　碁にいとりむざめの畧にや徒目あとにより或八難目と

ものがたり方相氏の四目に擬にや或難の目にや源氏にはけ去めはや

とゝえゝり

たゝる　　採紙あり又矯紙いしためかゝゝと云是ナリ神代紀にはかゝゝとあり萬葉集に梓弓末中たゝてといふ式

伏三起とあり弓紙矯る体にや貫之の歌

手ヒふれて月日へにけりあきまゝ弓おきふし寐ハいこそ神まつ

此おきふしとよめる同意なるへし衣紋にもたゝるといふ

○蓄積紙いふ後撰集に

紀とふ亟家　神ふりけゝめ世のゝき時の洞にそ入ル

徒然草ふとりためとゝゝたまるハ彼よりいふ詞之法をるゝ音

通夫金葉集に

おゝとひ君葉末に結ふ白露の多ゝくさてハゝもたまるす

二ハ義紙葉にる歌女藏人左近

ふまやこのあゝちれまゝ弓人ゝこそハおゝとひたゝるゝる事もかなん

ためいき　　長息紙いふ息紙ためいふ之○霊

異記に禊麁紙ためいゝとよめり下のいきゝ通夫此いきハ生の義なり

ためみづ　　防虞水紙いふ火災の用心水なり

たゝえいけ　　塘紙よめり穿地注水曰塘とゝえゝり泊とまゝ

同

ためんごろも　　歩眠衣とゝり褻衣ゝといふ

△だゝ　　助語にいふ萬葉集にいゝだゝあゝ猛ゝとゝゝ

幾だゝもの畧なり

たゝき　　手持木の義たゝん柴ともいふ鳥柴附のゝゝとゝ

たゝん　　長屋造り紙多門ゝ云ハ松永久秀和州志貴の昆

沙門堂の上ふ多門の城紙築きて其営構紙摸セゝゝ事起

まゝゝとゝ

たゝろ　　手脆きなり鷹の爪ゝゝえゝり

○たゝ　　古人集に足九ゝくゝもゆゝゝもゝゝくゝもゝ

えくぼ　笑窪　伊勢物語に綾氏よりあり綾怠の意くたひまく
寒氏也
たやすし　容易或ハ輙字氏よりあり手易きの義なるへし
○天正の比は我士に輙所あり
たゆげ　源氏に西河海に史記の隨窟氏よりあり怠氣の義
あるへし方丈記にたゆかしくもいへり
△たゝす　小児かゝすかす夷意にいへり大学記にもつゝえあり
今定の義ホや俗に吸字氏よりあり字書にその義ゝえ夷埃嚢抄
に賺字氏よりあり
たゝ波　弘法大師の歌に
かくてかりたゝ手氏去きるかぬ君あるをたゝきやたまそもいさるゝ
たゝ波ハ達磨翻云法多茶伽陀翻云佛也○琉球宮古嶌の間
切にもあり
たゝハして　祝詞に置足ハしてといへり所足とあり今足

の義ゝ置高成てもゝえゝあり高成もたゝハしてとよむへさやか
音通せり置足成ともあり
△たゝふ夷波　儀式帳に綿(タヽ)被とあり又納綿(ノレタヽ)あり
たゝや　鎮魂祭に十氏訓せり足の義なるへし
たゝこや　新撰字鏡に誰氏よりあり演也とゝえゝあり足
言の義にや
たゝくち　新撰字鏡に崑氏よりあり無口の義なるへし
崑と同し
△たるゝ　垂の義にや俗にひたるゝまさるゝひさるゝ
かゝいつゝひハ乾るの義まハ目かひハかひあり孫へし石見に手
足のたるき牽氏ハしといへり伊勢集に
夜もすがら物おもふ人はのたゝるつゝ玄ハかひあるさるちそ高くまさるる
たるき　和名抄に樓又椽氏よりあり無木の義ゝ新撰字鏡
ホ榑氏たゝ木とゝみ榛氏ひさゝのたゝ木とゝあり榛又

間杖をまゐらたるみ

氏姓所名ゑ無水と云う萬葉集ゑ石走無水と
はぐけるとゝハ清水の流るゝ所いみあるべくれと少しの水ゑは泡
るゝ遠江の奥山ハ大さかるゝ滝所也たるゝ無水の畧か
るゝとゝ云う柳宗元ゑ詩ゑ無水叢峯と云へるゝ○或ゑ海字
所を訓せゝ臨はゝ或三代実録ゑ皆播磨国海神社と云ふこハ明
石郡無見郷ゑ坐ゐるゝ推て訓せしものゝ顕昭説ゑ津国と
播広の堺ゑ無水と云ふ所あゝとゝ云ふ無水神社ハ式及萬葉集
ゑ摂津と云ふ豊嶋郡ゑ有姓氏録ゑも此山より冷水ゆるゝ所
云ふ○たる井のゝ河花集ゑ云ふ美濃ゑ無井あゝ○無水
廣信ハ伊勢安濃郡無水邑の人元弘建武の頃上昏して天皇
所諫む聽まさる所とゝく退ゝ耕す私ゑ史六十五巻所
撰ゝ此時四書の朱注始て我邦ゑ来ゝ所深く尊信ゝ萬
里小路黄門ゑ勧めゝ黄門ハ藤房卿也再ひ微まん事所聞

て飯野郡蛸路村小かくるとゝ云ふ此事とゝ長濟草ゑ巻て虚
説ゝとゝ云ふ予ゝ近隣ゝ所ゝて無水村蛸路村ゝ所ゝ
き遺跡とゝ一口碑も傳へゝ事ゝ思ふ事所委く記せる信ゝ思ふ学論ゑ吉野先主之時獨清
軒健俊始唱程朱之義ゝ云ふ

△たきゝ　誰かをくゝ助の詞蜀志ゑ九巻ゝ云ふ
阿誰ゝ二字所ゝ阿ハ俗語の發声也儀式ゝ用ふ是ゝ
たれぬの　類聚雑要東三條室礼ゝ無布ゑ云ふ
たまこめて　帳簾ゝ所ゝ所ゝ
△たゝ　古今集ゑ技もたゝかとゝ云ふ撓むの意ゝ所
といふゝ同ゝ萬葉集ゑ多ゝ云ふ
たゝやひか　古事記倭建命の歌ゑ手弱肘の義ゝや
△よゝお通ゝ
たゝゝハ　萬葉集ゑ手童児ゝ云ふ母の手ゝ云ふ夫日足ゝの

乳児ハ以ていとけなし

△たゝあり　天皇大変に慶し禪讓位ハ退き給ふ人ニ不附封邑不座臣位先帝上皇と称し奉て帝号ハ失ハ或雖然主上ハ悍ありて遠く帝都ハ避く國ハ隔たる多ハ本朝の先蹤也

倭訓栞中編巻之十三終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan